

EDUCATION

第12回国際医学生生理学クイズ大会2014 (IMSPQ 2014) 報告

東京慈恵会医科大学細胞生理学講座 南沢 享

第12回 Inter-Medical School Physiology Quiz (IMSPQ) が、2014年8月22-23日に、マレーシア・マラヤ大学において開催されました。私はIMSPQに関して本学会誌での報告[1-3]を読んでいたことや、台湾で開催されたFAOPSの懇親会でIMSPQの創始者であるCheng Hwee Ming教授(University of Malaya, 生理学)からぜひ参加するように直接お誘いがあったこともあり、以前から参加してみたいと思っていたところ、今年、Pharmacology & Physiology International Scientific Congress 2014 (PPISC 2014) が丁度同時期にクアラルンプールで開催されるのに併せて、オブザーバーとして参加させて頂きました。今回の会場はクアラルンプール中心部から車で20分程度の郊外に位置する、広大なマラヤ大学敷地内のホール(Auditorium Mercuri Alam Bina)を利用しました。年々、本大会の規模は大きくなっており、今年は24カ国、88の大学が参加しました。この中には群馬大学チームを含め、12の新たな大学の参加があったそうです。

大会はチーム戦で、1チームは3~5名の医学生で構成されます。大会の進め方はこの数年、変わりがないようです。大会は2日間にわたって行われ、まず1日目に正誤形式の問題100問を75分間で解答する筆記テストが参加メンバー全員に対して行われました。チームの平均点上位40大学が2日目の本戦に進みました。本戦は変則的なトーナメント形式で各チームは3名で構成され、3~5チームによって得点を競いました。各チームから1名ずつ、ひな壇に上がり、一人一人に出題者が問題を読み上げる形式のクイズが出されました。まずはクイズを出された選手が優先的に解答する権

利があり、15秒以内に解答できればポイントを獲得できますが、誤った解答または無解答の場合、別のチームが早押しで解答権を得ます。それが正解であればポイントを獲得し、誤っていればマイナスポイントになります。それを全チームに繰り返し行い、3ラウンド総合で最高点をえたチームが次のステージに進みます。最終的にタイのMahidol University、中国のSecond Military Medical University、ミャンマーのUniversity of Medicine (2) Yangonの3チームで決勝戦が争われ、University of Medicine (2) Yangonが優勝しました。ミャンマーの学生達の素朴で真摯な態度にとっても好感が持てました。参加費は30USドルで、この中に宿泊代(大学内の寄宿舎)、食事代、記念Tシャツ代が含まれます。今回の審査員はマレーシア国内の医学部、オーストラリア、台湾、タイからの生理学者でした。

以下は今大会を見学して感じたことです。

1) 国際交流の場：医学生という同じバックグラウンドをもつ若者が、クイズというcompetitionを通じて目的をひとつにするため、とても良い感じの一体感が生まれています。第1日目の夜のレセプションでは踊りや歌などお国柄満載のパフォーマンスを披露しあうのも交流に大いに役立っていると思います。Cheng Hwee Ming教授は学生達のアイドルのようで、大会終了後には皆が先生のまわりに集まって記念撮影をしていたのがとても印象的でした。ここで知り合った各国の学生達の中には、医師になった後も長く交流が続く人も少なくないように思われました。また、日本人の学生にとっては、アジアの中の日本、ということ意識するための、とても良い機会にも思

います。

2) 英語力：公用語は英語ですが、基本的にアジア系の学生が多く、英語が母国語でない学生達の集まりのため、日本の学生が参加する場合でもハードルは低いと思われます。ただ、これまでのレポート同様に少しアクセントのあるアジア系の英語を聞き取り、かつ表現する能力が問われるため、最初は他のアジアの学生達に圧倒されるかもしれません。おそらく日本以外の参加校は毎年参加していて、各大学にノウハウが蓄積されていると思われます。大会中、出題される問題を一生懸命メモしている学生の姿も散見されました。

日本の殆どの医学生は知的好奇心が旺盛だと思えます。大学に入ったとたん勉強には全く興味をなくしたかのようにしかみえない学生も実は知的刺激に飢えているように思います。如何に学生がもつ潜在的な学習への意欲を引き出すことが出来るのか、が教師としての力量になると思えますが、その点で IMSPQ のような企画は学生の向上心に火をつけるには格好の場であると思えました。他の国の学生達も大いに刺激を受けている様

子が web サイト [4] から伺うことが出来ます。

Cheng Hwee Ming 教授は日本人学生がもっと参加してくれることを願っています。パンフレットには石松秀先生（西九州大学）による日本生理学会教育委員会からの参加案内も掲載されています(添付写真)。そのためにはまず、教員が学生のために汗をかく覚悟が必要で、実はここが一番他の国の教員と違うのではないかと危惧しています。百聞は一見にしかず、学生もですが、ぜひ教員の方々だけでも参加してみてください。

文 献

1. 石松 秀ほか：7th Inter-Medical School Physiology Quiz に参加して。 <http://physiology.jp/exec/page/page20100405184052/>
2. 河合康明：第6回 IMSPQ に参加して。 <http://physiology.jp/exec/page/page20080917181458/>
3. 渋谷まさと、河合康明：第5回国際医学生生理学クイズ大会 2007 報告 <http://physiology.jp/exec/page/page20080108003210/>
4. Phang Chen Rong：Inter-Medical School Physiology Quiz (IMSPQ), 2014： <http://perdanauniversity.edu.my/physiology-quiz-2014/>

「教育のページ」は学部学生、大学院生、ポスドク、教員などを対象に、生理学教育に関する取り組みや意見を紹介することを目的としています。原稿は Web（日本生理学会ホームページ）上にも掲載されます。皆様のご投稿をお待ちしています。投稿規程は <http://physiology.jp/exec/page/kyoiku-page-kitei/> をご参照ください。